愛の行方

滝龍太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛の行方

【Nコード】

N0944J

【作者名】

滝龍太郎

【あらすじ】

学生運動の仲間、一則と路子は一則の怪我がきっかけで同棲する事になった。

そして、二人とも大学をやめ、路子はスーパーの正社員になって朝から晩まで働いていた。

一則は痛めた足が思うように動かず、満足する賃金が貰えず、職を転々としていた。

そんな一則を見て、路子は愚痴の一つも言わず尽くして来たが・・・。

灰色の雲のすきまから、ときおり陽の光が射している。陽だまりでは猫が目を細めている。ときおり強い風が吹くと、体をちぢませニヤーと泣き、違う陽溜まりを探そうかと身を低くしてすぐにも動ける態勢をとっている。

「俺たちと同じだな」

そんな光景を窓越しから見ていた矢頭一則は、同棲している路子に聞こえよがしに呟いた。

「何が？」

「猫」

一則は猫から目を離さず、路子が側に来ても窓の外に顔を向けたままだ。

「猫がどうしたの？」

路子も窓の外を覗いた。

良いところがあれば身を翻して動いて行く。丸つきり俺たちと一緒だと、一則は心の中で思った。それを、わざわざ路子に言うのはおっくうだった。

一則は大学三年の時、ある抗議デモで機動隊とぶつかり大ケガをしてしまった。その看病を、同じ仲間の路子が献身的に尽くしてくれた。

そして、退院と同時に、路子と新たな出発をしたのである。ところが世間の風は冷たく、思うようにいかず職を転々とする生活が続いていた。

痛めた右足は思うように動かず、満足できる賃金を貰うことができない。その苛立ちから、ときには上役と喧嘩になり、そのまま職

場をほつぱり出したこともあった。そんな姿をのべつ見ている路子だが、愚痴の一つも言わず陰で支えて来た。パートの収入ではおぼつかないと、スーパ―の正社員になり、朝から晩までせつせと働いていた。そんな路子の苦労を爪の先ほども分かつてあげようとした。一則は、ただ単に自分のケガをいとおしんでばかりいた。

「ちよつと出掛けて来る」

路子にとつての大事な週一度の休み。まして今日みたいに寒い日は、一則と肩を寄り添って一日暮らしていたいと思つていたが、毎日ぼさつと遊んでいる一則にはそれが重荷になつていた。何も言わない路子だが、一則にとつてはその沈黙が心の動揺を見透かされているようで却つて怖かつたのである。

「寒いからジャンパーを着ていった方がいいわ」

引き留めたり、どこへ行くのかと詮索したりは決してしなかつた。それは一緒になる前から、運動家である一則の行動に対して路子は何も言えなかつたのである。たとえそれを口に出しても、俺の道に誤りはないと言われるに決まつている。そんな一則を好きになつたのだからと、路子はそう自分に言い聞かせていた。

今も、出掛ける一則にとやかく言うことは何も無い。それより外に行つて心の気晴らしをしてくれるのであれば、路子のささやかな願いなんか吹き飛んでしまう。

この暮れに来て、職を見つけに行くのではないだろう。街をふらつき、本屋でも覗いて時間を潰すに決まつている。

それでもいい、暮れの忙しい最後の休みだが、あの人が良いのならそれでいいわ。路子は心の中で呟いた。

一緒になつたところのことを思い出してもしょうがない。それは良い思い出として胸の中にそつとしまつて置こう。一度でも良い思い出があるのだからと、路子は自分に言い聞かせていた。

狭い部屋は二人でいると暖かいが、玄関を開けると北風が部屋全体に入つて来て路子の心を冷たくした。

一則は何も言わず、戸を閉めた。

(さあ、洗濯、掃除、全部やってしまわなくちゃ)
路子は心の中に思い出を置き、暮れの忙しさに没頭した。

2

今年の一月。暮れから引き続いてきた学生と学校側との対立は、年が明けるとさらに激化して行った。

学校側の不正金脈と不正人事問題、さらに拍車をかけたのが来年度からの授業料値上げ。学生側は年明けから学校に立て籠もり、建物を占拠してしまった。その中心人物の一人に、矢頭一則がいた。そして、十数名いる女子生徒の一人に路子がいた。

しかし、占拠した初日に学生側の言い分が学校側に受け入れられ、難なく解決されてしまった。

この東西大学は、今までこのような不祥事は一度もなく、平穩無事に過ぎて来ただけに、学校側としては早い解決を望むため学生側の言い分を受け入れたのである。

私立大学というのは一企業であって、学生が集まらなければ成り立たないのである。新入学も間近に迫っていたこともあり、学校側は全面的に降りたのである。その結果として、学長の交替と何人かの教授の首がすげ替えられた。

一則たち三年生の幹部たちは、このあっさりとした解決にいささかの不安はもっていた。

「なあ、矢頭」

同じ三年の平松が真っ赤な顔を向けた。

「何だと思う？」

簡単に要求を飲んだ裏には何かがあるのではないかと、皆の気持ちは一緒だった。

全面解決の誓約書を読み上げ、学生連盟の同士たちは氣勢を上げた。そして、今宵は解散となり、リーダーの小川はじめ、斉藤、平松、片岡、鈴木そして一則の幹部六人が、連盟の隠れ家で祝勝会を

あげていた。

「学長の退任で学校側は面目を保ったわけだけど、今度の学長の前歴が気に食わない」

同じように赤い顔をした一則が、目をきつくして平松の顔を見た。「なんで役人が私立大学の学長になるんだ？しかも元事務次官がだ。ぶんぶん匂つてしょうがないよ」

目の前にいる平松に怒つてもしょうがないのだけど、つい一則の口調はきつい言葉になって出てしまう。

「ああ。東西大学出身のエリートだからと表向きは言ってたが、俺もうさん臭いとは思っている」

やるせないといった表情で、平松はコップに注がれた日本酒をグイツと一気に飲み干した。

「我々の要求を簡単に飲んだ裏には何かがある」

リーダーの小川が拳を作り、声を張り上げた。

「授業料の据え置き、何人かの教授のすげ替え、そして学長交替。このままで取り敢えず我々の気を治めるに成功はしたわけだが、学校側としては何の解決にもなっていない。金脈、人脈で揺れた問題は首を切るといふやり方で双方納得したわけだけど、授業料値上げについては、そう簡単に引き下げる訳にはいかないだろう。新入生が入り、一段落したところでまたやって来るに違いない。その時こそ決戦になる。我々はあと一年で終わりだが、新たに入るやつは四年もあるわけだからな。どこかの金持ち大学と違うんだから、俺たちが何とかしてやらないと・・・」

「そういうことだ。リーダーの言うことはもつともだ！」

隅の方でチビチビやっていた喧嘩っ早い斉藤が、突然大声を出した。

「卒業、入学を控えて学校が揺れていては大変なことになる。取り敢えずここは無難に切り抜けておいて、リーダーの言う一段落した当たりに必ずやって来ると思う。それに新学長・・・、何と言ったっけ？」

齊藤が一則を見た。

「前野だよ」

一則が吐き捨てるように言った。

「その前野だ。元役人だか何だか知らないが俺たちには関係ない。その時はその時で叩きつぶすしかない。相手がどう出ようと、だれに替わろうと絶対に授業料の値上げだけは阻止する」

「そつだ！」

齊藤の力強い言葉に、一同、氣勢をあげた。

事実、授業料を値上げすると学業をおろそかにする学生がかなり出て来る。ここ東西大学は、私立大学の中ではレベルがかなり上で、学生は日本全国から集まって来る。その中にはワンルームマンションなどを借りて数人で住んでいる者もあれば、大所帯の下宿で寝泊まりしている者もある。そして、その大多数の学生はアルバイトに精を出し、授業料、下宿代などを稼ぎ出して通っているのである。昔から苦学生の集まる大学として、全国にその名を轟かせているのである。

「お前んとこの田舎じゃ、またいっぱい来るんだろう？」

齊藤が平松に聞いた。

「ああ。俺んとこじゃ私立は東西大学って決めてるからな」

平松の故郷、秋田県 町ではこれといった産業もなく、冬は豪雪地帯で名高く、それゆえ勉強にいそしむ時間が多いせいから大学への進学が当たり前になっている町なのである。そんなところなので、裕福な家などほとんどなく、国立、公立、そして、私立では東西大学と、当然の志望校として皆めざしているのである。

「後輩のためにも引き下がるわけにはいかないんだ」

遠い故郷を思い出し、平松は目を細めた。

一月も終わり近くなると、学校側と学生側との対立もキャンパス

内にはその余韻はなくなり、健康的な風景に戻っていた。

一則と平松は同じ下宿に住んでおり、お互いの部屋を行ったり来りしていた。部屋といっても苦学生の下宿、古びた木造二階建て四畳半に三尺の物入れが着いただけの部屋である。中廊下の両側に五つつづつ部屋が並び、その突き当たりに大きい洗面所があり、その横にトイレが三つ並んでいる。

一則と平松が住んでいる二階は全ていっぱい、朝の洗面、トイレの順番は先輩からの順と暗黙のうちに決められていた。

一階は部屋が六つしかなく、後は全員が一堂に座れる食堂があり、朝と晩の食事はそこで摂ることができる。

何も無い四畳半に炬燵を置き、冬はそのまま布団替わりに使っている一則を見て、アルバイトで貯め小さな炬燵を買った同宿者が増えて来た。ただ、新入生などはまだその余裕がないので、冬になると近くの銭湯でゆっくり体を温ませ、冷めないうちに布団を被って寝てしまうのである。一則は自分の部屋を解放し、そんな下級生に暖を取らせていたのである。しかし、下級生の足が遠のくようになったのは炬燵を購入したからというだけではなく、一則の部屋を掃除しに来る一人の女性が現れたことに因るところが多かった。

同じ学生運動の仲間である路子は、一則に好意を寄せていて何かと世話を焼きたがっていた。朝食を運んで来たり、部屋の掃除をしたり、気に入られようと男所帯の下宿へ足を運んだのである。

一方、一則は同じ運動家の仲間としか路子を見ていないので、幹部である一則に世話をしているとしか考えていなかった。当然、女としてなど見てはいなかった。路子もそれは分かっていることなので、それ以上を一則に求めることはしなかった。

「やつはしょっちゅう来てるみたいだけど、お前は何も感じないのか？」

平松は、路子のが気になっていた。

「路子か？」

どうでもいいといった表情でテレビに見入っていた一則は、顔を

向けずに返事をした。この白黒テレビをもって来たのは路子である。アルバイトで貯めたお金を一則のためにテレビを買ったのである。この下宿唯一のテレビである。下級生などもテレビを見に来るが、それは路子が帰った後と決まっていた。安普請の木造建築、路子が帰ったことはその足音だけで十分だった。

「お前はただの世話焼きとしか見てないが、やつは真剣だぞ」

平松は一則の前では路子のことをやつと呼んでいた。運動家の中では、名字ではなく名前と呼ぶのが多かった。

「たとえ真剣であっても俺には関係ない。好きだと言われたらそうかと言っし、抱いてと言えば抱くかもしれないし、それ以上の感情は俺には持ち合わせてない」

冷たい表情で冷たい言葉を、平松に言った。

「冷たいな」

「ああ」

「お前のその冷たさが、運動家として生きているわけか」
平松が皮肉った。

「おい、冗談はよせよ。俺は決して冷たくなんかないぜ。運動家は情熱的じゃなければ務まらない。一つのことをやり遂げるためにも、ただ、女に対しては何の情熱もなくてね」

「でも受け入れる気持ちはあるわけだろ？」

「路子か？」

「いや……。やつのことだけではなく、一般的に」

「そりゃ、俺だって男だからな。やりたい時だってあるさ。でも同じ運動家の女とはな。ちよっとまずいよ」

「何がまずいもんか。リーダーだって俊江とうまくやってるじゃないか」

「あれはあれさ」

「何が」

「リーダーだから……」

そう言って、一則は口をつぐんでしまった。

平松は、一生懸命やっている路子が不憫でならなかった。路子の気持ちは痛いほど分かっているのに、一則が一向に向いてやらないことに苛立ちさえ感じていたのである。

「リーダーだろうが何だろうが関係ないよ。同じ仲間であっても所詮は男と女だよ。やつが一生懸命アプローチしてるのにお前ってやつは……」

「いいだろう?」

せつかくテレビを見ているのに、横でごちゃごちゃ言われてはたまったもんじゃないと、一則がうるさかった。

「俺のことは俺でやるから、お前はそんなに心配することなんかないだろう? 路子、路子って、あいつは勝手に俺の部屋に上がり込んで掃除をするわ、かたづけするわ、テレビをもって来るわで確かに一生懸命だけど、俺は路子を女と見てないからな。分かったか? ただのお節介をしている女中としか思っていないんだから」

そう言って、一則は再びテレビに見入ってしまった。

これ以上言っても路子の気持ちを分かるうとしない一則に、平松はやれやれといった表情でテレビに視線を向けた。

4

三月。桜が咲き、めっきり春らしくなってきた。

東西大学は相変わらず沈静を保っていたが、学生連盟幹部の斉藤が、妙なことを聞いて来た。学生連盟の幹部六人を何らかの理由で進級させず、弱者のたわごととして始末させるということであった。斉藤の彼女の友達の姉に、東西大学の庶務課に勤めてる人がいて、妹のさぐりから斉藤の耳にその話が入ったのである。

まず斉藤は、リーダーの小川にこの話の内容を伝えた。

「前野は、俺たちに思い知らせようとしているのだろう?」

小川は斉藤の話に冷静であった。

「そんなことをしていれば進級できないぞと、留年を発表すれば少

なからず新たに我々の仲間に入るといふ人はいなくなるだろうからな。そして、四年になれば我々みたいなことをせず、おとなしくしていれば確実に卒業の道が開かれるのだからな」

小川が苦笑した。

「そいつらはそいつらでほっとけばいいだろうが、我々は三年だろうが四年であろうが、断固戦わなければ……」

小川の冷静な言葉に、斉藤が拳を張り上げた。

「その四年にさせないという口実が面白いじゃないか。皆、単位は取っているし、試験もまあまあだし、何をもつて言い訳してくるか楽しみじゃないか。な、その後で考えればいいじゃないか」

「そんな悠長なことでもいいのか？ こっちから仕掛けた方がいいのと違うか？」

「まだはつきりと分かった訳じゃないんだから、こっちから仕掛けるわけにはいかない」

「これほどの情報が入っているのか？」

斉藤は苛立つて来た。

「ああ。まだはつきりした訳じゃない。もう少しやつらの動きを見てからにしよう」

「そんなんで大丈夫か？ やつらに先手を取られて潰されるかも知れない。我々だけ留年させられたら、他の連中は脱会するかも知れないぞ。自分たちが四年で幹部が三年ではだれもついては来ない」

「その時はそれでいいじゃないか。どうせ四年になれば脱会する者は増えて来る。そして新たに三年生を入れたらいい。今の二年生の数を増やせばいいことだ」

小川の悠長な考えに、斉藤は我慢仕切れずついに噛み付いた。

「四年になれず、留年した我々について来る者がどれほどいるかな。俺だったら絶対に嫌だね。それに留年させられてまでやる奴がどこにいると思う？ ……リーダーは自分を買いかぶりすぎてるのと違うか？」

小川がムツとした顔で斉藤を見た。

そんな小川の顔色が変わったのを見て、斉藤は余計まくしたてた。

「現に我々全員が留年と決まった時、何人が残ると思う？ おそらくだれもいないんじゃないかな。いくらリーダーに忠誠を尽くしていても、こと自分に降りかかる代償をみて、自分をそこまで落としてやる奴が何人いると思う？」

「それは分からない。人それぞれ自分の置かれた立場が違うからな。ただ、一つ言えることは、ここまで皆で力を合わせてやって来たのだから、そう簡単には引き下がれないということだ。そして、留年問題については断固戦う。我々のためだけではなく、後輩のためにもある。そう簡単に留年なんぞできるわけがない。それに値する理由がないじゃないか」

小川が斉藤を諭すような言い方をしたが、もはや斉藤はその域を脱していた。

これは小川と斉藤だけの問題ではなく、幹部全員の問題なのである。全員を招集し、議論を交えなければならぬ。

斉藤は、小川を外して皆の意見が聞きたいと思っている。

5

即、行動する斉藤にとって、小川の考えがどうしても理解できないでいた。血気盛んなころの小川はどこへ行ってしまったのか、斉藤の気持ちの中で小川をリーダーと認めているものが徐々に失いかけていた。

「お前は どう思う？」

斉藤が、一則にこの事を聞いた。

「ここのところはリーダーの考えにまかせた方が良いと思うが……」

相手の出方を見ながら戦略を練り、方向づけを決めて行くとういふ小川の考えを、一則はある程度理解していた。

「そんな悠長なことでもいいのか？ 留年させられたらどうするんだ？」

齊藤の気持ちの中では、この留年という言葉が重くのしかかっていた。

「そう簡単に留年できるわけがないだろう。我々は東西大学の学生であつて、授業を受け、試験もやり、授業料も払っているんだ。ただちよつと学校に反発、いや抗議だな。そんなことで勝手に留年させられるわけがないじゃないか」

平松が唾を飛ばしながら齊藤の言葉を遮った。

「お前も一緒なのか」

齊藤が目を吊り上げて平松を見た。

「そんな牙を抜かれたライオンについて行くのか？」

「なに！ それはリーダーのことを言ってるのか！」

平松が齊藤に食つてかかった。

「まあよせよ」

一則が割つて入った。

「ここでそんな議論をしても始まらないだろう。お前の気持ちは分かるが、リーダーだつてそんなに悠長には構えていないはずだ。それに片岡や鈴木もこの話を聞いてどういう考えを持つか、皆で話し合おう。なつ、齊藤、中傷はやめよう」

「ああ、ちよつと言い過ぎたかもしれないが、何となく苛立って来ているんだ」

「分かるよ。お前は血気盛んだもんな」

一則の言葉に、齊藤が苦笑した。

事態の深刻さは容易なものではない。学校側が正当なやり方で留年を決定させた時、リーダーの小川はどう決断するのか、齊藤だけでなく一則も平松も不安の色は隠せなかった。

翌日、アジトに幹部全員が集まった。

片岡、鈴木も、昨夜齊藤からの連絡で事の成り行きを聞いている。小川の静観論、これに同調している一則、平松。真つ向から武闘論

の斉藤。若干、斉藤に傾いている片岡、鈴木。六人が入り乱れての論戦になっていた。

「いいかい、留年にでもなってみろよ、いい笑い者だよ。それだけじゃない、郷里にだって何て言っていていいやら。平松、お前なんかもつと大変だろう?」

絶対に阻止するという斉藤が、同じ境遇の平松に振った。

「そりゃ親に対してまこと申し訳ないが、郷里の母校に対しては皆のために戦っているんだと、責められることはないと思う。後輩のために必死なのは分かって貰えると思う」

平松だつて大変なのである。母校の卒業生のために授業料の値上げだけは何としても阻止しなければならぬのである。たとえ、自分が留年させられてもである。

「でも、なんで留年させられなければならないんだ?」

根本的な質問を、片岡が聞いた。

「学校側に逆らつたからだよ」

「それはお前の彼女からの話だろ?」

「ああ。庶務課に知り合いがいるんだ」

斉藤は、そのいきさつを皆に詳しく話した。

「仮に前野がそうやって来ても、我々が納得しなければいいんだろ?」

「納得するもしないも、一方的に留年を決定されたら終わりだよ」

「そんな馬鹿な。どんな理由であれ、勝手にそんなことができるわけがない。その時はその時だ。俺も戦うぜ。なつ、鈴木」

「ああ、俺だつて大変なんだ」

片岡の言葉に、鈴木が拳を作った。

「まあ、待て」

皆の気持ちがあつたところで、リーダーの小川が鎮めた。

「戦うのは簡単。その時はその時でやるしかないけど、今は相手の出方を見たほうがいい」

「なんでだ!」

すかさず斉藤が言った。

「情報が足らなすぎる」

「そんなことはない。これで十分だ。早いところ手を打たないと後手、後手になってしまう。前野という男はそんな生易しい人間じゃないことはリーダーだってよく知っているだろうに。奇襲をかけられたら終わりだぞ」

「そんなことはしないとと思うけどな」

「矢頭、お前までそんな悠長なこと言うのか」

一則の言葉に斉藤が噛み付いた。

「いきなり留年の発表をされたらどうする？へたすりゃ我々六人だけが孤立してしまい、他のメンバーもそっぽを向くかも知れんのだぞ。そうなりゃいい笑い者だよ……。とにかく、俺はやるからな」

「まあ待てよ」

斉藤の独壇場に、平松が意見を述べた。

「お前の、その彼女の友人とやらを、一度皆の前で話を聞かせてもらう訳にはいかないか。いや、その彼女を疑っているわけじゃないが、もう少し詳しく聞いてみたいと思わないか？」

「ああ」

皆、平松の言葉に頷いた。

「それからでもいいだろう？　なあ、斉藤」　斉藤は黙っている。

「リーダー、その方がいいだろう？」

「そうだな、そこでもう一度議論して、その時に決めよう。どうだ？　斉藤」

しばらく考えていた斉藤は、しぶしぶ平松の案に賛成した。

そういう平松の方こそ、重大な感心事なのである。

6

相変わらず、路子は一則の世話をしに下宿に来ていた。

「何か大変なことになってるみたいね」

うつむき加減の一則に、お茶を入れながら路子が言った。

「聞いたのか？」

「ええ、洋子から」

「そうか。斉藤がひどく興奮している。なんとかしないと……」
「何を？」

路子は、いつもならそんなに突っ込んで聞いただけなのに、今日は斉藤の彼女である洋子から大変なことを聞いたので、一則から結論を引き出そうとしている。

「証言を……」

一則が路子を見た。いつもと違って真剣な顔で一則を見ている。その顔のためかいつもなら適当にはぐらかしていたのだが、一則は同じ仲間意識を強くして自分の今の気持ちを正直に伝えた。

まるで女中が家政婦にしか見られていなかった路子にとって、初めて自分の胸の内をさらけ出してくれた一則に、深く感激してしまった。

最初はその勇姿に憧れ、やがてそれが愛に変わり下宿に押し寄せようになり、世話を焼くことによって自分の気持ちを満たしていた。

それだけでいい、それができるだけでいいと、いつも心の中で叫んでいた路子だったが、この真剣な気持ちをついに一則は分かってくれたのである。

ただ、一則は愛だなんだの気持ちはまだ遠く、同じ仲間である意識の中で路子を受け入れたのである。連盟の話などで同じ下宿仲間の平松と議論をしている時、そばに路子がいても路子に同意を求めなくてもなく、目の隅にも入れてなかったのである。

路子は、なぜか涙が出て来た。

「矢頭さん」

一則の名前を口に出した。

「ん？」

一則是、涙を流している路子の顔を見て、真剣な顔になった。
「何でもないわ」

と、言ったと同時に一則の胸に顔を埋めた。そんな路子がいとおしく、一則是路子を抱き締めた。

そこへ、廊下を走る音で、いつまでもこうしていたいと願う路子の気持ちが破られた。

「おい、一則！」

いきなり戸を開け、平松が入って来た。

二人は咄嗟に離れたが、平松の眼には寄り添っていたことが網膜にうつすらと焼き付いていた。

一瞬、平松は声を失い一則を見た。そして、すぐに打ち消し、
「斉藤が大変なことをした！」
と、大声を出した。

「何だと！」

「今しがた突入したらしい」

「馬鹿な」

一則是そう言うと、すぐに上着を羽織り平松の後、廊下を走った。
その後に、路子も遅れずにと二人の後を追った。

校門の前には大勢の人がいた。形ばかりのバリケードがあり、門の内外の至るところに大きなポスターが貼ってあった。

『不当な留年、断固反対！』

『前野は我々を排除し、授業料値上げをしようとしている！』

『卒業の前に決着を！』

など、勝手なことが書かれていた。

平松と一則はそれを横目で見て、キャンパス内を走った。

その中の木立にも、同様なポスターが何枚となく貼り付けてあった。

「馬鹿な」

突き当たりに大きな講堂があり、その左隣に教授室の建物がある。その建物の前にはひとときわ大勢の人がいた。

そして、そこには高くバリケードが積まれていた。
「リーダー！」

平松が小川を見つけた。そばに仲間も何人かいた。

「斉藤が突入した。片岡、鈴木も一緒だ」

小川の言葉に、平松も一則も耳を疑った。

「片岡と鈴木も？」

「ああ。あれから三人で話し合っただんじやないかな。ここでやらねばと思っただに違いない」

「リーダー、どうする？」

平松は小川の出方を伺った。

「もうすぐ前野が来る。そこで俺は話し合っつもりだ」

「でも、あいつらは我々の気持ちとは裏腹な行動をしてみましたんだぞ。リーダーが何を話すのか知らないが、前野はまず我々を先に潰すんじゃないか？」

一則が小川に食ってかかった。

「そうなるかも知れん。でもここで黙ってるわけにはいかない。たとえ斉藤たちと一致しなくても、元は一緒なんだ。やるだけやってみるよ」

同じ仲間がしでかしたこと、小川はそれを真剣に受け止めていた。

「分かった。俺たちは何をしたらいい？」

「斉藤たちは前野と直談判したいみたいだ。俺の言うことも聞かない。何とか話ができるようにしてみてくれ」

前野が来たという言葉に、小川はそれだけ言うと校門の方に走って行った。

教授室の建物は三階建てで、三階の会議室には小さなバルコニーがあり、そこから斉藤が大声で喚き散らしている。斉藤を囲んで仲間が七・八人、一緒になって声を張り上げている。

片岡と鈴木はどこにいるのだろう。

平松と一則是、建物の裏側に回った。

裏口にもバリケードが高く積んであった。

「おい、片岡、鈴木」

「せんぱーい」

小さな裏窓から仲間が返事をした。

「片岡と鈴木はどこにいる？」

平松が怒鳴った。

「奥で打ち合わせをしています」

「呼んで来れるか？」

「聞いてきます」

一人が奥に引っ込んだ。

「なんでこうなったんだ？」

もう一人の仲間に、一則が叫んだ。

「分かりません。今朝、いきなり斉藤先輩から突入するぞと連絡があつたのです」

「斉藤から？」

「そうです」

一則是うーんと唸り、平松と顔を見合わせた。

そこへ、小窓から鈴木の顔が覗いた。

「おう、鈴木。一体どうしたんだ」

「悪いな、勝手なことをしてしまって。俺も片岡もあれから斉藤に煽られてしまって、居ても立ってもいられなくなってしまい加勢してしまつたんだ」

鈴木はどうしようもなかったと言わんばかりの顔で、平松と一則を見た。

「そうか。表では斉藤が怒鳴っていたけど、お前たちも覚悟はしてるんだろっ」

「勿論だ。リーダーを出し抜いて勝手にこんなことをしてしまつたんだからな。片岡も同じだ」

「リーダーは今、前野のところに行ってる」

「前野のところへ？」

「ああ、さつき校内に入って来たのを見てリーダーがすっ飛んで行った。仲間を見殺しにはできないと言ってるな」

「そうか……」

鈴木が天を見上げた。

そこへ、表の方から拡声器で怒鳴る声が聞こえた。

「君たちはすぐに投降しなさい。そんな馬鹿なことはやめてすぐに出て来なさい」

前野の声である。

平松と一則が表へ行きかけた時、仲間が五・六人二人の方に向かって来た。

「先輩！ 大変だ！」

「リーダーがやられた」

「なに！」

平松と一則は足を止めた。

「機動隊に袋だたきにされ、仲間も何人かやられました」

「先輩たちも危ないから中に入って下さい」

そう言っただけ仲間がバリケードをずらし、中にいた仲間も手伝って、平松と一則、そして外にいた仲間全員が建物の中に入った。

「お前たちのリーダーはすでに捕まえた。もう観念しなさい。これ以上がんばってみても同じです。早く出て来なさい」

前野が再び拡声器で怒鳴っている。

それを聞いた斉藤は、バルコニーに出て拡声器に負けない大声で怒鳴った。

「うるさい！ お前なんぞ学長でもなんでもない。そして……、今から俺がリーダーだ」

それを聞いて、同じバルコニーにいた仲間十数名が拍手をした。

平松と一則は鈴木と一緒に片岡のところへ行き、斉藤のいるバルコニーに向かった。

「おーっ、来てくれたか。勝手にこんなことをしたことは謝る」

齊藤が、平松と一則にペコリと頭を下げた。

「今は説明してる暇がないので言わないが、後できつちり話す」

と言つて、齊藤はまた前野に向かって怒鳴った。

「お前たちの言いなりになってたまるか！俺は自分を守るのと同じ時にこの学校を守ってるんだ」

そつだそつだと仲間が一緒に大声を出した。

「いい加減にしろ！」

下では、ついに前野が堪忍袋の緒を切った。

前野の言葉に、校門の前で待機していた機動隊が一斉になだれ込んで来た。その数は百名近く、教授室の建物目がけて突進して来た。放水車も一緒である。

「行けーっ！」

前野の号令でバリケードを壊し始めた。

それを見た齊藤たちは、バルコニーの上からこぶし大の石を機動隊に向かって投石した。機動隊はそれに怯まず、バリケードを壊し建物に突進した。放水車はバルコニーに向けて放水を始めた。

そんな攻防が三十分ほど経過したところで、所詮、準備不足のためか簡単に齊藤たち全員捕まってしまった。

抵抗をすればするほど機動隊にこっぴどくやられ、連盟の方はケガ人が続出してしまった。特に齊藤は全身をめった打ちされ、かなりの重傷を負ってしまった。一則も機動隊数名に追われ、二階から転げ落ちてしまい右足を複雑骨折してしまった。

結局、連盟二十二名の内、十六名が担架で運ばれた。

前野の容赦ない鉄槌が下されたのである。

学生連盟は前野の実力行使であつたという間に解体され、今回の騒動に参加しなかった仲間も捕らえられてしまった。

リーダーの小川はじめ幹部六人は全員留年が決まり、騒動の渦中にいた者も参加しなかった者も全員が一カ月から二カ月の自宅謹慎処分を強いられた。

「複雑骨折じゃ、直ってもリハビリを入れて半年か」

自宅謹慎処分が明け、連日献身的な看護をしてきている路子に一則が口を開いた。

「そうよ。早くて半年だから、留年はちょうど良かったのかも知れないわ」

一則の世話を一から十まで看ることができるので、路子は心なしか喜んでいいる。

「でも金がもたないな」

一則がぼそりと言った。

「大丈夫。私がなんとかするわ」

「そうはいかないよ」

「いいってば……」

路子はルンルンしながらタオルを畳んだ。

「今のアルバイト、もう少し延長することができるの。だから来る時間少し遅くなるけど」

輝いた瞳を一則に向けた。

「あ、ああ」

どう言っているのやら、一則はそれしか言えなかった。

「何ならやめちゃってもいいの……。未練はないわ」

「大学を？」

「ええ」

一緒に居られるのなら大学をやめても未練はないと、一則を世話してから路子の気持ちは大きく揺れていた。

何のために入った大学か、今は一則と遭えたことだけに感謝をしているのである。

後一年で卒業であるが今この時を大切にしていきたい。自分が大業をやめることによって、一則の世話をすることができ、また自分

の生活もやって行くことができるのである。この時を逃してしまえば一則との愛が壊れてしまうのではないかと、路子は心を痛めていた。

「本当は勉強が苦手なんだ」

路子がいたずらっぽく一則に言った。

「そうか、俺も実のことを言つとそうなんだ。大学を卒業して一流企業に就職してなんて考えていたけど……、逸れてしまったもんな」

「いいわ。逸れた分、私が何とかするわ。大学が全てじゃないわ」

「そうだよな」

一則は路子の励ましに心が和らいで来た。

「俺もやめちゃおうかな」

「大学を？」

「そう」

「そして？」

「うーん……。一緒に暮らす」

「ほんと！」

路子は一則の言葉に有頂天になった。

「嬉しい……。私、一生懸命看病するわ。そして、一生懸命働く。そして……。すぐ大学をやめるわ。そうすればアルバイトじゃなくちゃんと働けるわ。そして、矢頭、ううん、かずのり」

路子は、初めて矢頭のことをかずのりと呼び、一人で照れてしまった。

「一則は……。早く足を直して。そして、新しい生活をスタートするのよ。小さな部屋を借りて」

路子は心の中で暖めていたことを喋った。将来の、幸せな生活を夢いっぱい膨らませていた。

路子は大学をやめ、スーパーの正社員になった。毎日、朝から晩まで働き、終わるとすぐに病院に駆けつけ一則の看病をしていた。

そんな生活が半年続き、心身共に疲れ切っているはずなのに、一則の顔を見ると消し飛んでいた。一則と生活することが実現できるのだと、自分に言い聞かせ頑張つて来たのである。

「小さなアパートを借りたわ」

「すまん。路子にばかり苦労させて」

「そんなの、苦労と思つてないから」

既に一則の足は松葉杖をつけ歩けるようになっており、退院は目の前であった。

「駅まで近いのよ」

「それじゃ路子が大変じゃないか」

路子の勤めるスーパーは駅からはかなり離れていた。

「私はいいの。自転車で行けばどうつてことないから。それより一則は電車に乗るんだから駅に近くなるちゃ」

自分のことよりも常に一則のことを気にかけている路子である。

そんな路子をいとおしく思う一則は、早く路子を楽にさせてやりたいと思つていた。

「一DKだけどいいわよね」

「ああ、路子が良ければ俺は何だつていいよ」

「ほんと？」

路子は嬉しくてたまらなかつた。新しい生活がもうじき始まる。

常に一則と一緒にいられる。路子の夢がもうじき実現する。

「何にもないけどいい？」

「ああ」

「カーテンは友達からお古をもらったの」

「良かったね」

「食器もけっこうもらったわ」

一言、一言が楽しそうである。

「でも、テーブルは買った。それと、小さな冷蔵庫と蒲団も買ったわ」

「大丈夫なのか？」

「ええ。月賦」

路子が舌をペロツと出した。

「よし、すぐに働いて返そう」

一則はそう言い、路子を抱き締めた。

そんな楽しい会話が続けている最中に、一則が退院した。同時に大学をやめ、一社会人として一步を踏み出した。

世話女房の路子に、快適な生活を送らせてもらっている一則は、それに応えようと必死に頑張った。

歩けるようにはなったが右足はちょっと引きずる格好になってしまった。リハビリを完全にやればいいのだろうが、一則に与えられた時間にそんな余裕はなかった。

まずはどんなものでもいいから働かなくてはと、友人の紹介でコンクリートブロックを積む仕事についた。

折からの住宅ブームで、外構関係の仕事は素人でも雇うほどに手が足りなかった。

最初は積むことなど当然できず、運搬専門である。ブロックを一輪車に積み現場へ運ぶのだが、道の狭い所では大通りにトラックを置き、そこから延々と一輪車で何度も往復することもあった。セメントや砂、水までも一輪車で運ぶのである。

慣れない一輪車を、しかも右足が不自由なので何度も引つ繰り返してしまふのである。その都度、親方に怒鳴られ歯を食いしばって耐えていたが、自分より年下の若い者に怒鳴られた時、つかつかとなり殴ってしまった。

そのことが原因でブロック屋の職を失い、その後、鉄筋屋、植木屋、ペンキ屋と仕事を変えたが、そのどれもが同じことが原因で変わったのである。

そんな一則を、路子は愚痴の一つも言わず、逆に足が悪いのだから

らと一則をいたわっていた。

最初の内は一則の気持ちにゆとりがあったが、その内だんだんと路子のいたわりが鼻に付くようになり、自分勝手な苛立ちを覚え路子に当たるようになって来た。

そして、暴力も振るようになり、路子は心身共に疲れきってしまった。

10

『二人で幸せを掴もうと必死になって来たけれど、あなたは他を向いてしまった。』

何度も何度も振り向かせようとしたけれどももう駄目なのね。

あの優しいあなたはどこへ行ってしまったの？ 私は今でもあなたを見ているわ』

手紙に書かれた文字はこれだけだった。

そして、路子が作った譜面が同封されていた。

あなたは冷たい人だと知った

その時すでにもう私は

戻れない昔へ黙って目を閉じて

思い出すのよ優しかったあなたを

あの時あなたは寂しくさせないと

約束したわこの私に

いつのまに変わった冷たいあなたの目 見て私をあのころ

と同じよ

ねえあなたもあのころに戻って

あなたは冷たい人だと違う

他のだれかを見ていただけ

寂しくて死にそうお願い振り向いて

見て私をも一度愛して

ねえあなたもあのころのあなたに

この手紙をテーブルの上に置き、師走の冷たい風の吹く日、路
子はそつと一則の元を去って行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0944j/>

愛の行方

2010年12月17日19時09分発行